



企画展示 探偵小説の系譜 <トピック展示>

# 日本探偵小説界の三大奇書

読むと精神が壊れる？

日本文学の「黒い水脈」と唱えられ、後に「アンチ・ミステリー」と称されることになった日本の三大奇書をご存知でしょうか。

- 夢野久作『ドグラ・マグラ』（1935年）
- 小栗虫太郎『黒死館殺人事件』（1935年）
- 中井英夫『虚無への供物』（1964年） - 初刊時は「塔晶夫」名義

以上三作品がこれに該当するのだが、いずれの作品も常軌を逸した、奇書と呼ぶに相応しいものとなっている。

## 『ドグラ・マグラ』

夢野久作の代表作とされる小説で、構想と執筆に10年以上の歳月をかけ、夢野が没する前年の1935年に刊行された推理小説。精神病科の独房に閉じ込められた記憶喪失の精神病患者である「私」が、過去に関わったとされる複数の事件の真犯人、そして動機や手口などが次第に明らかになるという内容であるが、奇妙な巻頭歌のほか、胎内での壮大な体験、脳髄の無限の神秘的可能性、そして精神病院の地獄的な描写など、要約不可能で難解な構成を持つ。

「本書を読破した者は、必ず一度は精神に異常を来たす」とも評される。

## 『黒死館殺人事件』

1934年、雑誌『新青年』に連載。日本のオカルト小説の代表書で、あまりにも壮大な知識の集大成のため、推理小説の一大神殿と称される程である。探偵法水麟太郎が、城館・黒死館で起こる奇怪な連続殺人事件に挑む、という内容であるが、ゲーテの『ファウスト』と同じテーマを持ち、9割以上は事件解決とは何ら関係のない神秘思想・占星術・異端神学・宗教学などの知識の集合体であり、そこが本作の難解な点である。

## 『虚無への供物』

1964年に刊行された中井英夫の代表作。推理小説でありながら推理小説であることを拒否する「アンチ・ミステリー」の傑作とされる。1954年に青函航路で起こった転覆事故「洞爺丸事故」をきっかけに構想された。氷沼家を舞台として繰り広げられる奇妙な殺人事件に居合わせた主人公たちが推理合戦を交わすが、滅茶苦茶な論理合戦の末、事態は益々混迷していくという内容である。ノックス、ヴァン・ダイン、江戸川乱歩の实在の小説を引用して推理を繰り広げる様は、推理というよりも冗談小説と理解された事もある。

『ドグラ・マグラ』読んで、頭が変になっちゃったらしいんだね。  
だから、おれはまだ相当感受性が強いなと思って、安心したよ。

横溝正史



企画展示 探偵小説の系譜 <トピック展示>

# あなたはどの幽霊塔を楽しみますか？

探偵小説の父、黒岩涙香は明治32（1899）年『幽霊塔』を『萬朝報』に連載した。秘密を隠すためのカラクリのある時計塔をめぐる事件を描いた長編であり、涙香の傑作と言われている。涙香は作中で、原作はMrs. BendisonのThe Phantom Towerと書いているが、このような著作、作者は実在しない。近年になり小森健太郎によって、実際はA・M・ウィリアムスンの『灰色の女』（1898）であることが判明し、論創海外ミステリに収録された。この『灰色の女』は、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』（1860）に強い影響を受けている。

江戸川乱歩は少年時代に涙香の『幽霊塔』と出会い、非常な感動を覚え、自分流にアレンジを加えて昭和12(1937)年に同じ『幽霊塔』というタイトルで出版している。

また、映画監督の宮崎駿は、中学時代に乱歩の『幽霊塔』を耽読しており、そのイメージは映画『ルパン三世 カリオストロの城』（昭和54年公開）へと繋

がった。今年になって岩波書店から宮崎駿の口絵入りで乱歩の『幽霊塔』が発売された。現在、三鷹の森ジブリ美術館では「幽霊塔へようこそ展：通俗文化の王道」が開催されている。

さらに、『医龍』がヒットした漫画家乃木坂太郎は、涙香の『幽霊塔』を基として漫画『幽麗塔』(平成23年-)を描いている。